

核データニュース編集の思い出

(NEDAC) 浅見哲夫

昨年秋に、原研を退職するに当って、核データニュースの編集委員長の役を原研核データセンターの中川庸雄さんと交代しました。記録を辿ってみると、1975年7月に編集にタッチしてから、まる13年間も核データニュースのお世話をやらせて頂いたこととなります。この間を振り返ると様々なことが思い出されます。この機会に、その一端をご紹介してみたいと思います。

上記のように、1975年7月のNo34号の編集が最初でした。当時は誌名も未だJNDCニュースの時代で、その頃は、核データ研究室長の更田さん（現原研副理事長）が1人で苦勞されていたのをお手伝することから私に加わったのですが、こんなに永く加わることになることは予想もできませんでした。通巻No43号までは更田さんとの共同編集で、初めは更田さんからいろいろと教わるが多く、馴れるにつれて実質的に私の担当と言うことになったのでした。この間、編集のことで更田さんとよく議論をしたことも楽しい思い出です。

1979年2月発行の通巻No44号から1985年3月のNo57号までは全く1人での編集で、悪戦苦闘の連続ながら結構楽しいものでした。58号からは編集委員会を設立していただき、数名の委員の方々と討議しながら一層楽しくやらせていただきました。

私が1人で編集をしていた当時の“あとがき”では、毎回、発行の遅れの言い訳ばかりが目立ち誠に心苦しい次第です。もっと早く編集委員会を設置してもらっていたら、私自身の負担も軽減でき、内容も多彩になって充実できたものにと残念に思われます。編集委員会をつくるアイディアは前からあったのですが、携る人が増えても口だけ出して実質的に動いてくれないのでは、かえって編集の機動性を欠き余計に重荷になるのではないかとの危惧のために見送りになっていたのです。

しかし、編集委員会が発足してみると、事実は全く逆で、もっと早く決断すべきだったと悔やまれました。もっとも選出された編集委員の面々が、物書きには個性的な見解を持ち、何よりも編集に大きな関心を寄せて下さったことが反映しているものと思います。それ以来今日まで、年3回の発行がほぼ完全に維持されているわけです。

過去の核データニュースをめくりながら感慨深く思い出されるのは、この間の原研核データセンターの変遷です。1976年6月1日に、それまでの核データ研究室から認可組織の原子核データ室が発足し、その際に、本誌も「JNDCニュース」から「核データニュース」と改題し、表紙も青色からうす紫色と衣変えとなりました。1977年7月1日からは現在の核データセンターが発足して、国外へもJAERI NDCとして通用するようになっています。

「核データニュース」へ変身した頃の、最大の悩みは巻頭言の扱いでした。何となく廃止と
なって久しいのですが、当時としては、最も力を入れていた記事で、執筆依頼や扱いには大変
苦勞したことが思い出されます。校正も入念にやったことを鮮明に記憶しています。その頃の
ことで思い出すのがNo.38号の伏見康治さんの原稿のことでした。「論文の評価以前のこと」と
題する稿で、今、改めて拝見しても新しく、興味深く面白い貴重な文ですが、いただいた原稿
をめぐる一寸した騒ぎがありました。どの部分だったか全く思い出せないのですが、ある1
文字、多分、“が”とか“の”とか言った助詞のたった1文字だったように思いますが、どう
もおかしいと言うことが、期せずして更田さんと同意見になったのでした。明らかな間違いで
あればともかく、その1文字によってかなり違う意味になってくるので大問題でした。間違い
であるという確証もなく大先生に誤りを云々するのも気が引けて大に困りました。さんざん
議論した挙句、印刷になって出廻ってからは手遅れになると決心して問合せたところ、やはり、
我々が思った通り誤りだったことが判り安堵したのでした。「核データニュース」は未公開の
小冊子ですが、このように、かなり気を遣って編集に当たってきたことをいささか自負している
次第です。

やはり、その頃の巻頭言で、吉沢康和さん、楢山一典さん、加藤敏郎さんが相継いで核デー
タの専門誌の必要性についてそれぞれ異なる観点から論議されたのが印象に残っています。そ
の後、専門誌は実現できないものの、本誌では「テクニカル・コメント」の欄を設けて、ご要
望の一端にお応えした形になってはいますが、専門誌の必要性は今どうなっているのでしょうか。
「テクニカル・コメント」も設けたものの、十分には活用されていないのが現状です。本誌とし
てもこの問題をもっと掘下げて解決に当るべきであったのではないかと、反省すること頻ります。

思い出を辿ってゆくと、次々と反省やら遣り残したことなどが出てきて尽きません。誌面の
関係もあって、それらは別の機会にしたいと思いますが、最後にもう1点、今だに気になって
いることを述べておきます。

それは本誌のサイズのことです。編集に当っては、できるだけ手間を省くために原稿の資料
などをそのまま写真印刷することが多いのですが、ほとんどの資料はA4版なので、本誌のサ
イズのB5版へ縮小することになります。核データのコミュニティも次第に高齢化しているの
に、わざわざ縮小して見にくい形にすることは無いと思ったわけです。その頃、丁度、市販の
科学系の大衆誌も軒並み大版へ衣替えをしていた時でしたので、いくつかの会合で提案したと
ころ、意外と少数ながら強い反対があって驚きました。その後、日本物理学会誌が大版へ変身
したときには、やられたとの気分だったのですが、その処置をめぐる様々の意見を物理学会誌
上で見て、この問題は思ったほど簡単でないことを痛感しました。

「核データニュース」を通じて多くのことを勉強させて頂いたことと共にまた多くの方々と
接触できる機会を持たせたことに厚く御礼申し上げます。今後も、「核データニュース」が増々
発展し、多くの読者を楽しませて下さるよう切に祈っております。